

信州児童文学会誌「とうげの旗」30号所収

小十郎と千代 (3)

松永ひろし

2022.2

目次

化け猫	2
どんぐり	3
赤とんぼ	4
クジラ	5
風穴	6
葉っぱ仮面	7
はち	8
サザンカ	9

【おもな人物】

桜木小十郎 十九歳。真一刀流免許皆伝。自宅に道場があり、齋藤又右衛門道場と荒木清右衛門道場で代稽古を行う。幼いころ、姉と草花遊びに興じ、草木に明るい。

齋藤千代 五歳。齋藤又右衛門の孫娘。おかつば頭。気ままでわがまま

化け猫

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるべ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。小十郎が又右衛門を師と敬うを幸いに、時に平気で小十郎に無理難題をいう。

井戸脇の小石を蹴飛ばして千代はいった。

「いじゅうさう あれほどあつかったのが うその
やうに おだやかになつたな」

「そうですね。気持ちいい日和ですね。暑さ寒さも
彼岸までと申しますから、秋の彼岸が過ぎた今は、
過ぎやすいのでしょう」

「あつさをむさも ひがんまでとは なんのこと
じゃ」

「世間でいわれる詞です。夏の暑さは、秋のお彼岸
を境に涼しくなり、冬の寒さは、春のお彼岸を境に
温かくなるといつたとえです。実際、小十郎もその
やうな気がします」

「だれが みつけた きまりじゃ」

「誰彼でなく、多くの人が感じたゆえの詞じゃ。
涼しさはやがて冬の寒さになります」

「ちよは さむいのは にがてじゃ。ふゆは いち

「ちぢゅう」「たつ」もへるぞ

「まるで猫ですな」

「んっ、ねじじゃ」

「寒くなる猫は、飼い主の膝の上や、たつなを温

かな場所に身を移します」「
 「そうか、ちよは、ねこか。ちよねこだな。そうだ
 あんどのの、あぶらを、なめて、はけねこに、なる
 つかぬ」
 「化け猫になって、いかがいたします」
 「ひつを、おどかすのは、ごつじや」「
 「なむらには、刀を抜いて斬つてきますよ」「
 「そ」は、だいにゃうぶじや。「じゅつじつが、ち
 ぢをまもるのじや」
 「お千代さまの用心棒はつけたまわりますが、化け
 猫の用心棒は「かかんべんを」
 と小十郎が断るやいなや、千代が、
 「はけねこになつてま、ちよは、ちよじや。あれ「
 れいわず、よ、ついでにほつて、なれ」

とてへつ

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古
 を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いている

たたきおとしておつた。ちよにも、なげてきたから
 けげてきた」

「で、お千代さまはドングリをそんなにたくさん集
 めて、いかがいたすおつもりですか」

「どうするか「これからかんがえる」

「ドングリは皮が堅いので、穴を開けるのは大変で
 す。錐があればよいのですが」

小十郎は納屋を探してみた。すると柵に、先が尖
 った三寸ほどの四角い釘が一つ置かれていた。小十
 郎は釘をつまんで千代に見せ、

「お千代さま、「これでいろいろつくれます」
 といつて一つのドングリの底に穴を開けると、矢竹
 の細い茎をさして、独楽をつくつた。

さびにやじるべえを作り、さびにさびに底から頭入
 穴を通したドングリを十ほどにしらえて、麻糸を通
 し、首飾りをつくつた。

千代が喜んだのは、いつまでもない。

と、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてき
 た。千代は五つ。気ままでわがまま。
 「じゅつじつ、ほら」
 と千代は着物の左たもとに右手をいれて、ドングリ
 を三つ取り出した。そして、
 「まだまだ、あるぞ」
 とたもとを振つてみせた。小十郎は訊いた。

「お千代さま、いす「でお拾ひに」」
 「せんげんじたいじや」

小十郎は浅間神社の境内に太いクヌギの樹がいく
 つもあることを知っている。おそろくそれらの樹の
 下で拾つたのであらう。

しかし、秋まつりにこの人さらいのことがある。
 それで、

「お千代さま、お一人で拾われたのですか」
 とたずねた。

「ひつじつはなご。しるまきすたぢぢじや」

「ほ、お、鶴吉たちは何ゆえにドングリをひろつたので
 じゅつ」

「しゅりけんじやとこつて、なげあつて、ぼつで

赤とんぼ

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古
 を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いている
 と、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてき
 た。千代は五つ。気ままでわがまま。その千代がい
 った。

「じゅつじつ、うらののはたけをとび、あかとんぼ
 が、ふえたみたいだが、きのせいか」

「たしかに、多くなりましたな。秋真つ盛りという
 感じですよ。おっ、一匹とんできました」

「じゅつじつ、つかまえよ」

「わかりました。なにかに止まるのをまちまじよつ」

すると、赤とんぼはツツジの株の、ひとつの枝の
 先に止まった。

「じゅつじつ、つかまえたぞ」

「はい、では、後からそつて近づいて」

と小十郎は右手を伸ばし、赤とんぼの細長い腹をつ

まんだ。赤とんぼは体を前に丸めて、小十郎の指を噛もうとする。小十郎はそれにかまわず、左手の中指と人さし指でバタバタ動く羽をはさんだ。

「つかまえました、お千代さま」

と見せると、千代は赤とんぼに顔をよせ、「でかいめじゃな。くちは さきがするどいぞ。ほそいものなら かみきってしまいたいぞじゃ。ン！ためしてみるか」

と行って足もとのオオバコの茎を抜いて、赤とんぼの口にあてた。とんぼは、その茎を噛みきった。

「おっ、すいぞ。かみきった」と千代が驚いた。小十郎はたずねた。

「お千代さま、この赤とんぼをどうしたいですか」「とんぼは はえや かを とらえてたべるからいいやつだと つるきちが いったぞ。こじゅうろつ それは まゆつばか」

「いえ、本当です」

「なら にがしてやれ。かが ちよのさをすつまえに かじきを せえんぶ たべちゃうつう ぐぐくいいきかせてな」

クジラ

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。千代がいった。「じゅつろう このじる にわから むしの なき」えが き」えるようになつたぞ」

「まっ、秋ですねえ。お千代さま、ほら、空にうる」雲です」

「じゅつろう あのかきは どんな さかなのじゅんじや」

「魚の鱗とは違います。雲の形です。なぜだか知りませぬが、秋になると、あのような雲があらわれるのじゅ」

「おひさまの じりのえものでは ないのか」

「お口なまは釣りをじませた」

「でも ときどき くものきれまから ひかりのい

とき たひすぞ」

「それはわたくしも見たことがございます。でも、釣り糸ではございせん。それにうるじ雲がでてくるときに、光の糸をみたおぼえはございせん」

「そつか。おひさま」 おおきなさかなを つりあげてほしかったのに、ざんねんじや」

大きな魚と聞いて小十郎は旅先の漁村で知った生き物のことを思い出した。

「お千代さま。日の本の周りの海にはクジラという大きな生き物があるそつです。漁師は舟に乗り込んでそれを浅瀬に追い込んだり、餌を投げて獲っていると聞きました」

「もりを ながるのか。なんとぞ いたましいな」

「クジラもまた、海からの贈り物です。一つ獲るだけで、村が大いにうるおつとか。なので手段はいとわめのでしよう。また、釣り上げまつにも、大きすぎる生き物ゆえ、見合つ釣針なぞ、ないのじょう」

「そつか しかたがないか。ならば いたくないよつ」 もりをなげてほしいものじや」

「えっ!?」 小十郎はわが耳を疑った。

風穴

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が白い息を吐きながら近づいてきた。千代は五つ。気ままでわがまま。

「じゅつろう きょうは ことじ さむいな。ほら いきが しるくなつてる」

「冬が間近に迫っているからじょう。今日、道場に来たとき、小だらいに薄氷が張っていました。雪が舞つのも間近ですな」

「じゅつろう いどのみずをしばった めのだからだをふいて つめたくないか」

「稽古を終えて体が火照っていますから、気になりません。それに夏冷たく感じる井戸の水も、冬は不思議に温かく感じるものです」

「なし いどでひやした すいかは つめたくて

あまくて おいしいかったぞ」

「はい。暑い夏の日、井戸水を飲むと冷たくて生き返りますね。そうそう姉上の嫁いだ信州深山藩の山里」は、夏でも、山の岩の隙間から冷たい空気が噴き出る風穴と呼ばれる場所があるそうです。村人はその穴の前に室をこしらえて、漬物を夏まで保存し、お城のお殿さまに献上するとか」

「なつにめたいくつきを ふきだすとは きつかにいじゃな。すきまのおくに ゆきおんなでも ひそんでおるのか」

「それはなつでじょう。ちがうとは言いきれませんが、なにぶん正体を見たものがなければ、なんともはせ」

「じごふじごふ たしかめていぬが」

「勘弁を。信州は遠いですし、ふぶきを操るといふ書女とは、出あいたくありません」

「しんじつじつじつでも はがたためが」

「相手は妖怪の類いです。人間は歯がたちませぬ。また、わが桜木家の家訓に、『君子危うきに近寄らず』がござります。小十郎はそれを守ります」

「ふっ、ゆるすべかりな かくんじやな」

千代が横目でニヤリとわらった。

葉っぱ仮面

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から何ものかが近づくと気配がした。

「お千代さまつね」

と小十郎が振り返ると、切れ込みのある大きな葉で顔を隠した、赤い着物の子がいた。

「あたいは ちよではない。はっぱかめんじや」

「ほお、葉っぱ仮面のは、この道場にいかな用がござりましたか」

「じごふじごふじごふをおどかすのじや」

「小十郎は、すくしですが驚きました。ただ残念ですが、又右衛門さまは道場にはおられませんよ。玄へ丞さま宅に出かけました」

「じごふじごふじごふ」

「はたはたあおごだ」

小十郎は笑って、

「葉っぱ仮面は、お顔が丸見えです」

はち

葉っぱ仮面の千代は、仰ぐ手を止めた。

「じごふじごふじごふ じれは なんの はちじや」

「ハツ手です。ハツ手の葉っぱ」

「やつでだど、やつこのつが」

千代はハツ手の切れ葉に人さし指をあて、

「ひいふうみい、ひいつむう、ななやあ」

「ハツの」と数えて、

「じごふじごふじごふは ちよひでなくと、ハツのじ

じや。ひつじ おおいぞ」

といった。小十郎が応えた。

「ハツ手の八は、裂片の数そのものというより、たぐさんあることをあらわしているそうです。多いという意味で八を用いるのはほかにありません。大江

と小十郎がいつて、葉っぱ仮面は顔を隠していた葉を顔から外して、「ハツやつてか」と小十郎に向かった

してみても

「いや ははつえに ねがわぬ」

「は… いかがして」

「あそびあいては 「に」にある。「じゅうざつ」な
を えんぎがよい はちに かえよ」

サザンカ

戸の八百八町、浪華の八百八橋、京の八百八寺など
です。そうそう、うそ八百なんてのもありますね」
「ふうん、八はおおいうてことなのか。おかっぱ
きの はちへえは、へえが おおいてことか」
「八兵衛の八は、へえ多いからでなく、文字の八が
末広がり の形ゆえ、縁起がよいとして親が名付
けたのでありまじょう」
「そうか、八は えんぎがよいか。そうだ、こいぬ
に はちと なつげよう」

初冬。剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場の

代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭い

ていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づ

いてきた。千代は五つ。氣ままでわがまま。その千

代が手にする枝の先には、おおぶりに赤い花が一輪

「じゅうざつ、うはきはなはなじゃ」

「じゅうざつ、あてがいましたか」

と小十郎は訊いた。

「んごうじの まえにわじゃ」

「手折るんごう、和尚さまの許しを得ましたか」

「おじょうは にわに おらんかった」

「うつのなまこまじつ」
「うんちのせわは いやじゃといたら、ならば
だめですと、ごわられた」
「安土玄之丞さまは、生き物を飼つとは、その命に
責任をもつこといわれ、病に伏した犬の五郎丸を、
下の世話までしました。お千代さまが、玄之丞さま
のお気持ちになられたら、あらためて母上にお願

い

「わかった。うきは そつする」

意外に千代は素直だった。小十郎は訊いた。

「お千代さま、その花の下の地面に、落ちた花はあ
りませんか」

「あつたぜ、はなひらななはひらひらひら十あ井」

「するん、お千代さまが手にたれたものは櫛では

なく山茶花ですね。櫛は花ひらひらがはひらひらひら

「しつとまつまり落ちますから」

「そつとつものか」

「葉の裏をいらんください。真ん中を通る脈に「ま
かい毛がありませんか」

「お、あ、あ、あ、あ」

「それも山茶花の特徴です。櫛にはありません。そ
してお千代さま、覚えておいてほしいのですが、山
茶花や櫛の枝や葉に毛虫や茶色い蛾がいたら決して
ちかすいてはいけません。毛虫も蛾も毒をもってい
るからです。毒針にさされると、かゆくなり腫れて
たい入んなしつなりませす」

千代がみけんじしわをよせてきました。

「そのがや、けむしはまきの はたにんか」

「そつではなく、櫛や山茶花の葉が好きだけでし
よ」

「わかった すきな はを ひとりじめしたいんだ
な。よくばりなやつだ。ちよは そんなやつはきら
いじゃ ちかひらいた」